

## ソーシャル・ディスタンス

飄

々

広報委員

津永 長門

昨年12月に中国武漢において原因不明の肺炎患者が初めて報告されて以来、パンドラの箱を開けたように世界中を大混乱に巻き込んでいます。しかし、日本人は真面目なのでしょうが、諸外国みたいにロックダウンしなくても、人出も7割から9割減を達成し、幸いにも、わが国では新型コロナウイルス感染症の第一波も収束に向かいつつあるようです。スピード感が求められる感染症対策ですが、なかなか数が増えないPCR検査や、いつまでも届かないアベノマスクなど、言いたいことは山ほどありますが、死亡率だけを見ると日本の死亡率は欧米と比較して格段に低く、日本の医療の優秀さを示すものと思います。が、もし厚労省の言うとおりに病床削減が進んでいたら、医療崩壊は今とは比較にならないほど深刻だったに違いありません。

ニュースやワイドショーでも新型コロナウイルス感染症についての話題が毎日取り上げられ、今年の流行語大賞にノミネートされそうな言葉も多く出てきました。ステイホーム、ロックダウン、クラスター、オーバーシュート、パンデミック、3つの密（三密）、オンライン飲み会、Zoom、テレワーク、等々。中でも最有力候補なのはソーシャル・ディスタンスでしょう。

先日、今夏の富士山のすべての登山道が閉鎖されるというニュースがありました。富士山に登られた方はご存じでしょうが、富士山の登山道は4つあり、どれも標高2,500mの五合目から登り始め、途中の山小屋で仮眠をしてから、御来光を見るために夜中に出発するというのが一般的なコー

スです。近年の富士山登山ブームのため、山小屋では布団1枚分のスペースに2人から3人詰め込まれ、八合目から山頂までは大渋滞を生じ、とてもじゃありませんが、ソーシャル・ディスタンスは取れません。しかも、日本一の高所です。肺には負担がかかり、私も登山した時に酸素飽和度を測ってみましたが、呼吸に気を付けないとSpO<sub>2</sub>が90%を切るほどでした。今年は、富士山に限らず、山小屋を利用する登山は諦めざるを得ません。

スーパーやコンビニで買い物をして、つい習慣でレジで前の人との間隔を詰めて並んでいると、「その線まで離れて下さい」と注意を受けることもしばしば。床を見ると確かに1mくらいの間隔でラインが引いてありました。

家庭内でも、ステイホームやテレワークのため、家族とのソーシャル・ディスタンスも問題となっているようです。家族と接する機会が増えて、家族団らんとなれば良いのですが、児童虐待やDVの増加も指摘されています。わが家は、子どもたちは、社会人や大学生なので家を離れており、夫婦二人、水入らずと言いたいところですが、コロナ以前は、会議や講演会、飲み会などで、家で食事するのは週の半分くらいでした。今は、イベントが軒並み中止や自粛でステイホームの毎日です。最初の頃は、ワインを飲みながら手料理に舌鼓を打っていましたが、そのうち、テイクアウトの料理が増え、最近では、いつまで会議などが自粛なのか聞かれる毎日です。やはり、妻とのソーシャル・ディスタンスが最も難しいようです。